

## 参加者から見る青空将棋による公共空間の居場所化に関する研究

居場所 公共空間 高齢者  
領有 組織

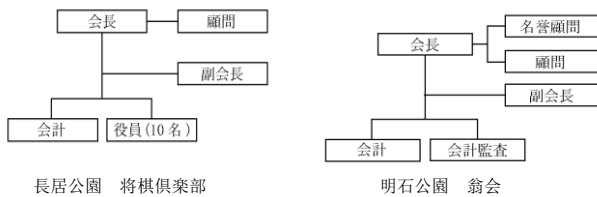
正会員 ○齊 欣\* 同 奥本 裕美子\*  
同 芝野 有祐\*\* 同 横山 俊祐\*\*\*  
同 徳尾野 徹\*\*\*\*

## 1. はじめに

老人福祉センターなど高齢者向けサービスを提供する専有施設は、高齢者を満足させ、高齢者の居場所となり得ていると一般的に思われている。一方、居場所とは、利用者自身が発見し、場を形成していくもの、とも考えられる。本研究は、後者の立場から青空将棋をモデルケースとして、高齢者が公共空間の領有による居場所化の可能性について探究するものである。

調査対象は長居公園、明石公園、入舟公園の青空将棋とその比較の阿倍野区老人福祉センターの将棋クラブの四箇所でありにアンケート及びヒアリング調査を行った。

このなか、長居公園では「長居公園将棋倶楽部」という名称で、プロ棋士を顧問につけ、会の権威を増し、明石公園では、「翁会」という名称で、市議員を顧問につけて活動している。このような組織や規律を作り、ルールをしっかりと守る活動を、本研究では組織化された青空将棋道場と定義する。



長居公園 将棋倶楽部

明石公園 翁会

## 2. 参加者の特性

## 1) 参加者の年齢

参加者の年齢から見ると、高齢者の方まで酸化している(図-1)長居公園では高齢者のみではなく、30代の方や50代も参加している。空将棋道場は多様な世代を受け入れる場であると言える。

## 2) 参加者の性別

長居公園に一人女性の方が居るのを除き、あとは全員が男性である。それは男性のほうは勝負事や、組織を運営したり、行事を企画することなど、生産性のある活動が好む。各々が役割を持ち、目的をもって参加することが出来る青空将棋は男性にとって居場所として適していると考えられる。

## 3) 参加者の棋力

参加者の棋力(図-2)から見ると、三箇所の公園では、指していなかったという答えがより多く見られる。しかも職場という棋力の低い答えも多数占められている。それに対し、阿倍野福祉センターでは、半数の参加者は将棋クラブの

ような棋力の高い所に通ったことがあった(図-3)。それでは青空将棋道場は、棋力に関わらず、誰でも受け入れることが分かった。

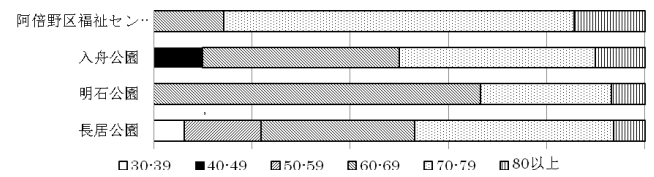


図-1 道場参加者の年齢分布

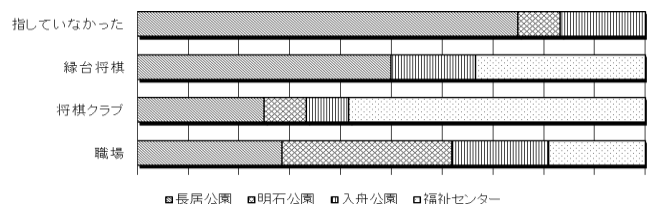


図-2 現在の道場に通う前の将棋の場所

—青空将棋をやってみてみたいと思われませんか。  
—公園でやってる奴らは下手糞の集まりやからな。(南千里市民センター)

図-3 青空将棋に対する意識 (ヒアリング調査結果による)

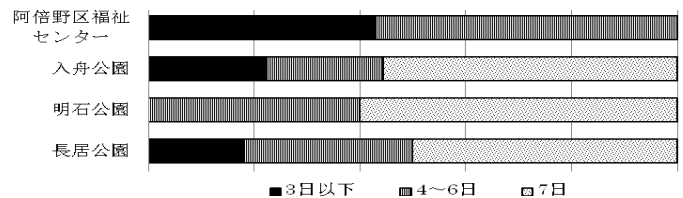


図-4 一週間のうち、参加する回数

## 3. 青空将棋道場の特性

## 1) 参加の頻度

参加の頻度(図-4)を見ると、三箇所の公園では一週間のうち週7日、雨が降らない限り参加するという人が半数にも達することは明らかになっている。それは青空将棋が多数の参加者の生活中心になっていることが言えるだろう。開放的な公共空間であるので、制約されない自由に使用できる。

## 2) 滞在の時間

滞在時間のグラフ(図-5)を見ると、長居公園や入舟公園の滞在時間が長くなっている。4時間以上滞在する参加者が殆どであった。しかも、超長い時間の滞在も可能で、長い人では9時間も滞在している。阿倍野区老人福祉センターでは、

帰宅時間が17:00となっており、長時間居ることができない。長居公園の滞在時間の図(図-6)を見ると、

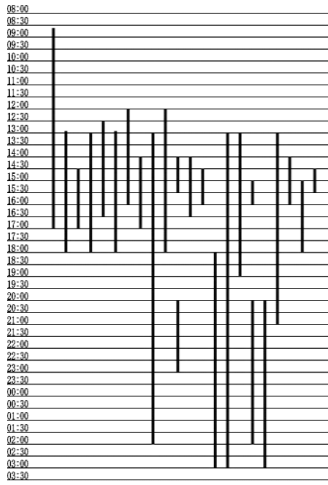


図-6 長居公園で過ごしている時間

朝早く9時半から夜の5時まで、まる一日公園に滞在する人や午後から深夜の2時まで滞在する人がいれば、夜6時から8時まで過ごす人もいる。開放性のある公園は様々な使用時間に応じられ、高齢者が自由な時間に、気軽に参加できる場であることが言える

3) 過ごし方

将棋道場での過ごし方(図-7, 8)をみると、阿倍野区老人福祉センターでは「将棋を指す」がほぼ10割となっている。これと比べ、長居公園では、将棋を指す以外に、観戦や雑談など自由な過ごし方が見られている。要因を考えると、長居公園では人数が多くて、指せない人と同じ会員の人や公園に寄ってきた人たちによる、自発的コミュニケーションを生まれ、様々な過ごし方が発生している。一方、阿倍野区老人福祉センターでは、空間と時間などの制約や将棋を指すことだけが目的の人が多いため、単なる将棋を指す場所になっている。

4) 周囲との関わり

公共空間である公園では、会員以外の人との触れ合いが多数発生している。対局中に初見の人が観戦に来た場合、明石公園や入舟公園では殆どの人が「話しかける」が、阿倍野区老人福祉センターでは「話しかけない」が過半数(図-9)。しかも、公園は公共の場所であるため、様々な人が行き交う中で将棋を指す。そのため、高齢者以外の人との関わりも自然と生まれている(表1)。それは、青空将棋道場では領有により、参加者は居場所と認識し、ホストとして、外来者に接すると考え。阿倍野区老人福祉センターではみんなサービスを受ける側と認識し、居場所を感じていない。

4. 総括

長居公園や入舟公園のような公共空間を領有することによる自分の居場所を作り出した青空将棋道場では、高齢者たちが場のホストとなって、多様な人々を受け入れている。占有と共有の場を比較すると、共有では様々な周囲との関わりが生まれており、社会的疎外感に悩む高齢者も多い中、共有の場は居心地の良い場となっている可能性がある。青空将棋は将棋を媒介として高齢者同士を結びつける場として機能していた。高齢者同士だけではなく、色々な

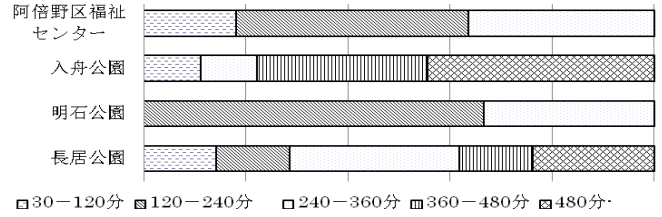


図-5 将棋道場に滞在する時間

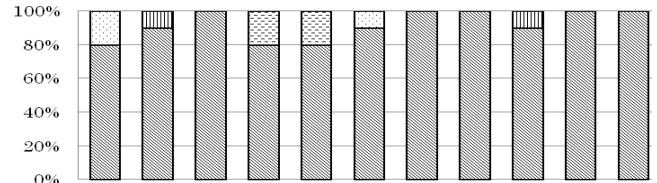


図-7 阿倍野区老人福祉センターでの一日の過ごし方

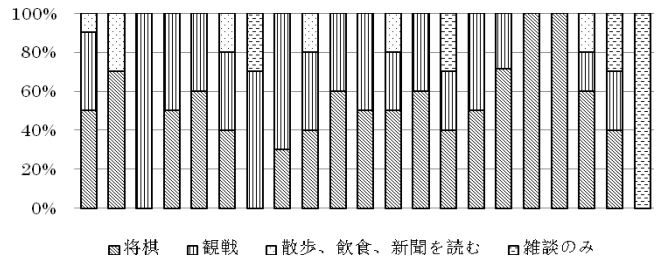


図-8 長居公園での一日の過ごし方

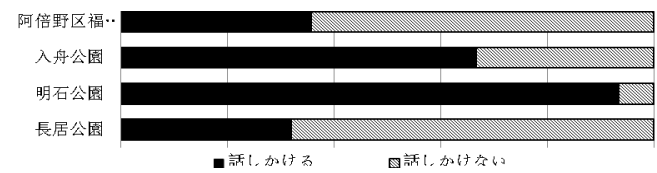


図-9 初めて見る観戦者に話しかけるか

表1. 囲との関わり方

長居公園	
1	青空カードゲームを楽しむ子供との会話
2	犬を連れて散歩に来た人との雑談、犬とのふれあい
3	入院中の会員の家族との会話[39]
4	他の青空将棋道場に通う人との対局
5	公園の喫茶店で働く人との雑談
6	小学生との対局[37]
7	大学(京大・同志社)の将棋部との対局
入舟公園	
1	子供の野球のボールを拾ってグラウンドに投げ返す[40]
2	小学生への指導・対局
3	仕事帰りの社会人との対局[38]

世代との触れ合いができる。現在の高齢者には、このような僅かな会話や、同じ空間で過ごすだけでも、その疎外感を和らげる役割を持っていると考えられる。

今後の高齢者福祉に必要なことは、高齢者同士の関係を生み出すことである。これからの高齢者福祉は、活動することが目的ではなく、活動を生むための高齢者同士の結びつきをつくることであると考えられる。今、そのために公共空間を活用してゆくことを検討すべきではないだろうか。

\*大阪市立大学大学院 工学研究科 前期博士課程  
 \*\*ららぽーとマネジメント株式会社  
 \*\*\*大阪市立大学大学院 工学研究科 教授・工博  
 \*\*\*\*大阪市立大学大学院 工学研究科 教授・工博

\*MasterCourse, Graduate School of Engineering, Osaka City University  
 \*\*LaLaport Management Co.,Ltd  
 \*\*\*Prof, Graduate School of Engineering, Osaka City University ,Dr.Eng  
 \*\*\*\*Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka City University, Lec.Eng